

スーパービジョンにおける バイザー／バイジー関係について

法政大学キャリアデザイン学部教授 廣川 進

1-1 はじめに

キャリアカウンセリングやキャリアコンサルティングにおいてスーパービジョンの重要性は多くの指摘がなされている(廣川 2019)。そもそも英語のスーパービジョン supervision には監督、指導、管理という意味がある。スーパーバイザーはスーパービジョンする人、スーパーバイジーはスーパービジョンを受ける人で、スーパーバイザーの仕事はスーパーバイジーがクライアントとのカウンセリングの質を維持向上させるためにその仕事ぶりを管理するという意味合いが強い。よりよきカウンセラーになるためのスーパーバイジー個人の自己理解、成長を促すような教育分析やカウンセリングは主要な要素としては位置づけられていない。また原語の語源からも super + vision 上から見るというはっきりとした上下の関係を前提としている。スーパーバイザー／スーパーバイジーの相互関係、それぞれの感情、考えがスーパービジョンのプロセスでどう変化していくのか、といった観点から論じられることは少ない(中田 2016)。

1-2 スーパーバイジーへのアンケート調査から

北添(2005)は臨床心理士養成大学院でまなぶ大学院生へのアンケート調査を行った。すでにケースを担当している院生対象で、スーパービ

ジョンでのケースに関係する自分の気持ちの扱い(表1)を聞くと、「スーパーバイザーに伝える」が14件(64%)、「スーパーバイズで取り扱っている」が9件(41%)と多数はきちんと取り扱われているようだが、「取り上げてもらえないように感じる」が4件(18%)、そもそも「スーパーバイザーに伝えない」が2件(9%)と意外にケースに関するカウンセラーとしての自分の「気持ち」がスーパービジョンにおいてテーマたりえていないケースも2割弱は存在していることがわかる。

またケースで困ったときの対応(表2)を聞くと、「スーパーバイザー等に相談する」が20件(91%)、「自分で考える」が12件(55%)、「仲間に相談する」が6件(27%)であった。「自分で考える」が半数程度しかいなかった。さらに、「スーパービジョンに望むこと」を聞くと、自分自身のレベルアップにふれた回答が8%とごくわずかであった。このことはさまざまな視点から論じられるべき重要な点だが、スーパーバイザーへの「依存」のテーマはスーパービジョンの場で扱われるべき重要なテーマであると思われる。また、スーパーバイザーはスーパーバイジーの依存傾向を個別のケースごとに測りながら、依存をさせないように自らのスーパービジョンの関わり方に対して厳しくチェックを怠らず、スーパーバイジーの自立を促す関わり方を意識する必要もあるだろう。

表1 スーパービジョンでのケースに関する自分の気持ちの取り扱い

	既担当 (n = 22)	
	件数(件)	件数/22(%)
スーパーバイザーに伝える	14	63.6
スーパーバイズで取り扱っている	9	40.9
取り上げてもらえないように感じる	4	18.2
スーパーバイザーに伝えない	2	9.1

表2 ケースで困ったときの対応

	既担当 (n = 22)	
	件数(件)	件数/22(%)
スーパーバイザー等に相談する	20	90.9
自分で考える	12	54.5
仲間に相談する	6	27.3

1-3 スーパーバイザーのあり方

中田(2016)は、Mearns を引きながら、バイザーとバイジーの間に横たわっている暗黙の関係性に注目し、その関係の中で出来上がってきた規範や期待について、双方の間で時間をとって検討すべきであると述べている。バイザーが真剣な関わりの中で自己一致し、バイジーに対して共感と一貫した肯定的評価を提供する「健康なSV関係」が求められている。つまり、バイザーがバイジーのありのままを個人としてもプロとしても尊重し、なおかつ新たな視点を提供もするという、「支持的な挑戦者」になることである。スーパービジョンとは、バイザーもバイジーも間違いを認識でき、積極的に探索し、個人として責任をもって学びを得ることができる場であるべきではないか、との提起である。

2 東京大学教育相談室スーパービジョンの記録(1965)より

ここに大学の教育相談室でのスーパービジョンの記録がある(沢田ら 1965)。50年以上前の記録だが、来談者中心主義のロジャーズ派の理念に

貫かれた貴重な記録である。全人間的に対等なクライアントとカウンセラーの関係、自由と主体性を損なわずに自己成長を促すような援助者側の関わり方など(村瀬 1965)、本稿の問題意識に大きな示唆を与える論文である。以下、その記述に即しながら、著者の解釈を記述していく。

2-1 スーパーバイザーのオリエンテーション

具体的なケースの検討に入る前に、スーパーバイザーのオリエンテーションの記述がある(野村 1965)。野村(以下N)は自らの治療観をこう述べる。治療の目的の全てに先立つ基本条件は、患者との出会いにおいて、治療者が新に人間的な意味で、成熟し、安定した深い関係を樹立し得ることにある。いいかえれば、人間が共にある時に、お互いが、自分自身であり得ること、あるいは自分自身であり得ることに向かって、お互いが役立つような関係といたい。「自分自身である」ということは、絶対的に、本来なる自己といったステティックな概念ではなく、いわば「よりありのまま」への流動的、相対的な過程を指し示している。

そして、スーパービジョンの具体的な目標は以下の2点に絞るといふ。

①セラピストは、スーパーバイザーと共にあることで、その治療の体験や感想をより自由に深く経験することができる。

②どうすればよいかという技術的問題を抜きにするわけではないが、それはむしろ①のプロセスへの具体的手がかりとして活用しようとする。

ここから具体的なケースの検討に入る。

○ケースの背景：クライアント M は 4 歳男児。1963 年 4 月に幼稚園に入園したが、幼稚園で母親から離れようとせず、不登園になっていることから来談。母子併行面接で M の前任の担当者(女性)が毎週 1 回 5 ヶ月間プレイセラピーをしていた。T が担当カウンセラーを引き継いで 4 ヶ月あまりたつが問題行動にはあまり改善はみられていない。

クライアントの家族関係：M、父母、姉(小 6)、H(弟、3 歳)の 5 人家族。64 年 1 月までお手伝いさんが同居。

父：工場の経営に忙しく、子どもたちの教育に無関心で母親に任せっぱなしであった。

母：自分の健康に自信がなく、家事をお手伝いさんに身体的にも精神的にも頼りがちだった。

お手伝いさん：仕事熱心で責任感強いが神経質で子どもを心配するあまり、部屋からあまり子どもを出そうとしなかった。

きょうだい間でのいじめの問題もあるようである。

○このスーパービジョンで取り上げている場面の記述

太字が記述の原文で、それに対して著者(廣川)が直感的に感じたコメントを加筆した。

これまで何回か警官(M)が泥棒(T)をつかまえる遊びを行ってきた。

プレイセラピーでは遊びの象徴的な意味を治療者は考えながら関わるのが基本である。この遊びの象徴的な意味はどんなものと解釈できるだろうか。家庭での反動がプレイルームで表されるとすると、圧倒的な権力、パワー、正義を持つ

側が罪を犯した人を捕まえて罰する、その泥棒の立場に M は置かれている可能性があるということである。その遊びは数多くの遊具がある中で 1 度ならず、繰り返されているということは、M がプレイルームで開放されるために必要なテーマだからであろう。家庭での警官の役は母親かお手伝いさんか姉か、父親か、それらの複合なのかはこの記述だけではわからないが、M の治療のためにもさらに詳しく探っていく必要がある。

M は T に手錠をかけて、命令口調であれこれと指図する。

家では立場が逆転して M が手錠をかけられ、あれこれ命令されて M には服従するしかない、たとえばお手伝いさんからあまり部屋の外に出してもらえない状況が重なる。

この遊びの途中で M は弟の H のことを話し出す。

M はこの遊びを数回繰り返す中で、この部屋ではストレスが発散解消できて、リラックスできてきた。言うこと、命令に従ってくれるカウンセラーの T へは警戒心も薄らぎ信頼感が芽生えてきている。そこで自分でも気がかりだった弟のことを話し出す。プレイセラピーの治療的効果の始まりのところである。カウンセラーとしてはあせらず自然体で M の語りをまず聴くことが基本であろう。

「自分の居ない間で自分の紙を使ってしまったりする。そんな時は(Mは)Hの髪の毛を引っ張ったり、お腹の上に乗ってやるんだ」という。

いきなりかなり激しい告白となったが、基本的には非評価的に聴くことが大切だろう。自分の不在の時に引き起こされたことへの怒りが激しい。これは、後述のプレイルームを M と T だけで専有したいという気持ち、他の子が T と関わることへの不安、嫉妬などの関連を考えることもできるだろう。根底には愛着の問題がありそうなことも検討テーマとなりそうである。

M は T を信頼して自分から話し出したのだが、T はこの機会に K の中の H に対する自分の在り方を反省してもらいたくなって、その話し合いを続けようと思う。

せっかく M が心を開きかけて話し始めたのに、T はいきなり「反省」をさせたくはない。プレイセラピーの基本からも外れているのではない。

そこで Boss.M. の手法を使って「M 君が H 君に乱暴しないようにできないのは、どうして？」と語りかけた。

精神分析家のメダルト・ボスの手法とは「現存在分析」のことと考えられる。患者の体験を単なる症候としてとらえるのではなく人間の全体状況から解釈しようとする立場をとる手法、考え方である。患者が示すさまざまな状態像を、「生きている世界」(世界内存在)の変化の直接の現れとして解釈(直感)する立場をとる(日本大百科全書(ニッポニカ))。その手法の是非はここでは措くとして、T からこんなふうに言われたら、できないことを責められていると 4 歳児でも大人でも受け取るだろう。

T の予想に反して、M は T に攻撃を向け始める。手錠をきつく締めたり、部屋の角に追い詰めたり、「先生は嫌いだ、大嫌いだ、出て行け」と叫ぶ。

信頼をして打ち明け始めた途端、責められたら M が豹変し激怒することは十分、予想された。「予想に反して」であるとするれば、予想できるようになるためにどう考えればよいのか、学習しなければならぬ、重要なポイントであろう。

T はその攻撃を受け入れるので大わらわで、M の気持ちを何とかなだめようとした。

しかし一方で、そのような攻撃という形で M の気持ちが表出されるのを喜んでもいた。

ここに至っても T は M の失望や怒りからくる攻撃の意味をわかっていないのではないか。この場を収めるのに有効なのは、「せっかく打ち明けてくれたのに、責めてしまうようなことを言ってごめんね」という謝罪の言葉ではないか。それが無いままなので、この回は K は憤慨したまま終わってしまった。

やや唐突ながら、廣川のコメントを先に挟んだのは、プレイセラピーの専門ではないが臨床心理

士養成大学院での院生やその他の実践家へのスーパービジョン経験も十数年行ってきた者が、上記の記述を聞いた時に思い浮かぶ観点を上げて、スーパーバイザーがその観点到気づいていないか、十分な理解がなされていないと感じたら、多くの場合、指導的なスーパービジョンをやりがちではないか、ということを示しておきたかったからである。

2-2 スーパービジョン逐語録での検討

スーパービジョンの逐語録と対応するスーパーバイザー(N)、スーパーバイザー(T)、コメンテーター(S)の内観を一覧表にまとめた(表3)。

○ M 君のケースについてのスーパービジョン(1964年1月29日)

N: スーパーバイザー(野村東助)

T: スーパーバイザー、T のカウンセラー(筒井健雄 博士課程)

M 君: T のクライアント(4歳)

H 君: クライアントの弟(3歳)

S: コメンテーター(佐治守夫)

N はこのケースについてのこれまでの話で T が「怖くなってしまって」いたことを指摘し T の内面的な感情を確かめようとする。しかし「負い目」「躊躇」「遠慮」「弱み」などの言葉が交わされるが、核心に至らない印象がある。それが N にはもどかしい。N が伝えたかったことをストレートに書き出してみよう。

・M の前の回で来ていた、小さい男児の手を T が洗っているのを見て、T のことを独り占めしたい M は、ショックで淋しくて T に対する憎しみの感情さえ感じていたのではないか。そのわだかまりが T への攻撃性を促進させているのかもしれない。

・そのことに気づいて T は負い目、躊躇、遠慮、弱みという言葉を使ったのか確かめたかった。

・手錠をかけてきたり、「おじさんが先生だってやっつけちゃうぞ」とスゴンできた時に M の攻撃性が明確になって、「来るべきものがきた」と

Nには感じられたが、Tにはその予感もなく、感じられていなかった。

以下、逐語（表3）にそって詳しく見ていく。

・N3) Nが臨床の経験上ピンときた解釈を述べているが、T3の応答をみてもTにはあまり伝わっていない。コメンテーターのSが指摘するように、「T君としては、他の子と親しくしているのをMにみられて、何か負担のような気持ち、負い目があるような感じがしていたのかしらね」といった言い方がふさわしかったといえるのではないかな。

・N5) 「おじさんが先生だってやっつけちゃうぞ」ってすごんできた時に、ある意味じゃ来るべきものがきたっていう感じでもあったわけなのかな（ウーン Tは首をかしげる）。

Tのこの様子を見たときに、Nはアプローチを変えて、Nとしてはこう解釈できるのだけれど、それについてTはどう思うのか、ということについて確かめるような問いかけもできたのではないかな。

・N7) 今回のスーパービジョンを通して最大のも山場であると思われる。NはN1からのやりとりで、Tが自分が思うような反応をしてこないことにいらだちを感じていて、Tの言葉をさえぎり、割り込んだ。それはTには勢い込んで向かってきたと受け止められている。せっかく心を開きかけたMに対しての「H君に乱暴しないようにしないのはどうして」という「問いかけ」の意味や影響について、確かめたい、本心にはこの問いかけからMのアグレッションを引き起こしたのではないかなという相当、否定的な直感的な評価があるはずだが、そこまでは記述されていない。

Sのコメント：N7の感じは確かに正しいのだろう。それだけにこの事を取り出すのに慎重であるべきだったのだろう。「さっきあなたが手錠をはめるのはいやだっていう気がしたということ、その辺にあなたのM君に対する気持ちの1つのあらわれがあるっていう風に私には思えるけど・・・その辺もう少し一緒に考えてみたいという気持ちがするんだけどね」

ここからN9、10、11くらいまでで、後述のスーパーバイザーの側の透明性を発揮して、自分が感じていることを率直に伝える、スーパーバイジーも自身の考えや感じ方を自由にすり合わせるができるような場の確保ができるといいのではないかな。またNが以下に、自分の大きな問題であると振り返るようにスーパーバイザー自身の厳しい自己点検が求められる箇所である。

「T8を聞いていて、私はN9のような解釈が生まれてきた。その時にはT自身もこう感じているような気がして、それを確かめるつもりだった。やはりこれは私自身の感じ方をTに押しつけているように思う。こういうことはこの後にも随所に出てくる。これは私自身の大きな問題である」

・N12) T11の「問いかけ」は（現存在分析の）ボスの方法を踏まえている、というような少し知的防衛が入り、「あなたには方法的で抵抗を感じるかも知れないけど」という少し皮肉めいたニュアンスの応答にも、表面上は平静であるが、Tが指摘するようにもっとも長い説明になっている。内面の苛立ちが強まったという側面はなかったのだろうか。この応答も透明性を徹底しようとしたら、知識や皮肉で防衛しようとするTのあり方についてのNの率直な感じ方を伝えるというやり方もあったのではないかなと思われる。

2-3 スーパーバイジーの立場から

ここからは振り返りの感想、考察に入る。まず筒井（1965）はスーパーバイジーの立場から率直に述べている。まず、スーパービジョンに望んだことは、自分の技術の向上。クライアントの状態をみながら、それに応じてどのように自分が動いていったらよいのかということを知ることだった。しかしクライアント中心の方式によるスーパービジョンから学んだことは「自分が相手の動きに応じてどう動くか」ということを考えるよりも、「相手のあり方動き方そのものを大切にすること」だった。クライアントは本質的に、動き成長するもので、その発展的な動きを活かし切るには治療者自身が成長していなければならない

表3 スーパービジョンの逐語録の分析表

逐語	N (SVor) の内観	T (SVee) の内観	S (コメンテーター)
<p>N1 君自身がこわくなっちゃった、その前にこういうことがあった、ということ。① T1 手が汚れていたの洗ってやったのね ②そういうときに彼が (M 君) お母さんに抱かれてこっちを見ているんだな、(1) お母さんにすがりつくようなちょっとそんな様子を見せてね。 (略)</p>	<p>①これまでの話のなかで「僕自身も何だか怖くなってしまっただけ」というのがあった。Tの説明にはいろいろなことが錯綜して出てくるので整理すると同時にTの内面的な感情の動きを確かめたかった。 ②この回のすぐ前にTはインタークとして2.5才の男子とプレイ室ですごした。終わって待合室でその子の汚れた手を一緒に洗ってやった。それを来て待っていたM君が見ていた。 ③Tが他の子に親しくしているのをM君がおだやかならぬ気持ちで受け取っていたのではないか、というTの負い目が「M君のアグレッション」という認知の仕方に影響しているのではないか、という気持ち。</p>		
<p>N3 その辺、自分の先生をあの子にとられちゃったって感じで彼としては少しショックだね。淋しくって一そのことがある意味じゃ君に対する憎しみのような感情になって、何かそのへんのところがわかまらなくなってたのが、さっき言ったアグレッションを促進させているんじゃないかなってこと。その感じがピンときたわけなんだな。③</p>	<p>N4 T3は「変わった事態に対して敏感な子どもだ」という程度のことだと今は思われる。私はN3の線に沿って少し先走りしてしまったようだ。</p>	<p>(1) この子は母親からの離れ際がいつもグズグズした様子を見せるのでTにとって気になっていたのだが、この日は特別Tの方をうかがっているように思われた。</p>	<p>N3では③でNが言いたがっていることをもって直截に言えただと思える。～「T君としては、他の子と親しくしているのをMにみられて、何か負担のような気持ち、負目があるような感じがしていたのかしらね」</p>
<p>T3 ～あの子ね、椅子が足りなかったとか部屋 (プレイルーム) が (前に来た時と) 変わっているとかいうことに対してかなり敏感なの、何か、自分がいない間にそこの状況が変わってるって。</p>			
<p>N4 もう少し言えばこの部屋は自分だけがこの先生と一緒にいられる、あと誰もこの部屋に来ない方がいいみたいな感じもあるんだね。 T4 そいつ僕たしかめてない、そういう気持ちはありながら何か一面で確かめることで僕自身躊躇している。～今、Nさんが表現したような気持ちで確かに彼の中にある。端緒となって・・・</p>			
<p>N5 何か君の中で確かめたいと思う形でひっかかっていただけに、その「おじさんが先生だってやっつけちゃうぞ」ってすごんできた時に、ある意味じゃ来るべきものがきたって感じでもあったわけなのかな (ウーン Tは首をかしげる) (2) 確かに自分を、自分に対して怒っているんだって感じはあったわけ。</p>		<p>(2) 来るべきものが来たって感じが私にはなかった。そのような予感もっていなかったから。</p>	<p>T5「確かに遠慮する気持ちがあった」という点を受け取りたい気がする (N6) N7の感じは確かに正しいのだろう。それだけにこの事を取り出すのに慎重であるべきだったのだから。「さっきあなたが手錠をはめるのはいやだ」という気がしたということ、その辺にあなたのM君に対する気持ちの1つのあらわれがあるっていう風に私には思えるけど・・・その辺もう少し一緒に考えてみたいという気持ちがするんだけどね」(Nにはそんな風に思えるということを確認すべきだったろう。)</p>
<p>T5 今日ね、確かに僕の方から彼に対する遠慮する気持ちがあった。それは僕の方の感じた弱みかもしれないけれども、彼がそんな風に見ていたんじゃないかなっていう時には、僕はそれを心配していたわけですけどもね。で、一面では彼が割に元気に遊ぶし、僕に抱かれて安心しているってところまでこう安心していたわけね。</p>			
<p>N6 少しずつ安心させられていた矢先だったわけだな。 T6 うんそれが出てきたときにはね。それでこう手錠を作るだけだね、何かこう、こはめてっていうの、だからそれを持っていっちゃはめているうちに、はまらなくちゃ N7 (Tの言葉を途中でさえぎっておかぶせるような調子で) あなたさっき「いやだった」って言ってたね。 T7 いやだとは N8 手錠をはめるのは・・・</p>	<p>N7 これはN1で確かめたかったことがなかなかすっきりしないので、あえてもう一度問いかけてみた。「いやだ」というTの情緒的反応は私にとってかなり重要なものに思われた。少しこだわりすぎるくらいに。Tがそのことにはっきり向かわないことにいらだつてもいた。T6の流れのままでは、その辺がまたうやむやになってしまいそうな気がした。</p>	<p>N7 Nがすごく勢い込んで向かってきたような感じだった。</p>	

逐 語	N (SVor) の内観	T (S Vee) の内観	S (コメンテーター)
<p>T8・9 ああ、いやだっていうのかね・・・話はちょっと前後するけどね、そのH君(弟)の話が出てきた時にね、僕はたしかこんな風に言ってみただよ。 「H君に乱暴しないようにしないのはどうしてって」そしたら途端にもうよそうって言ってね。かなりエモーショナルになってね。ちょっと大人に接するような接し方をしちゃったなというふうな気持ちね。 N9・10・11 あなたはその問いかけが確かに何らかの契機になったみたいなのかい。その時を境に何かエモーショナルになってきた(そう)ような気がする?君がそういう形で彼に問いかけたかったのは、問いかけた時の君の心中はどんなものだったのかしらね。 T11 ひとつにはね、ほくはBoss, M.なんかに影響されているところがあるんだね。本を読んでのことなんだけれども。それでこういう手法は使ってみたいなあっていう気持ちはあった。つまり「～しないのはどうしてか」っていう風なね。(略)子どもっていうのは何かこんな出方っていうのはNさんなんかには方法的で、こちらの構えを設定するようで、ちょっと抵抗を感じるのかもしれないけど。 N12 僕はね、その方法、手法それ自体が何か手法を使ったりしてはいけないとは思わないしね、つまり現実にどんなことがあるにせよ、自分がこうしてみたいっていう或る1つの自分の中のモチベーションがあるわけでしょ、働きかける対象に向かってのね、そのモチベーションを具体的にうまく生かせるような道具が必要なのわけでしょ。 ～僕、今聞いていて、むしろ確かめたいことは～あなたがなぜその手法を選んだのか、それを選ばせるあなたのもうひとつの深いモチベーションがあるわけでしょ。あなたがそういう問いかけでもって。もっともうまく生かされるかも知れないと思う、そのもとになるモチベーションがあるからこそ、具体的にそれを使ってみたいと思ったわけでしょ。 T12 僕はね、～弟のことが出て来たその機会をね、もっと生かせないかなっていう気持ち。(なるほど、なるほど) この前のときも弟の頭とぶつかって、鼻血を出したっていう時も、弟の気持ちっていうことをね、どんな風にとらえているか、触れてみたかった。その時はほとんど出てこなかったんだけど、今日なんかわりとよく話したの、そのことをたとえば髪の毛をすぐひっぱるとか、おなかの上のりとか。 N13 何かもう少し彼が弟を可愛がるような彼であってほしいっていう気持ちはなかったのかしら。 T13 そういう風に動いてもらいたいという気持ちはあった。 N14 動いてもらうようになる、そういう可能性に対して何か自分が積極的にでて行きかけたわけだね、彼がそうなるのを漠然とただ手をこまねいて待つより何か一緒にその可能性を切り開いていきかけた。 T14 そうなんですよ。(略)</p>	<p>T8を聞いていて、私はN9のような解釈が生まれてきた。その時にはT自身もこう感じているような気がして、それを確かめるつもりだった。やはりこれは私自身の感じ方をTに押しつけているように思う。こういうことはこの後にも随所に出てくる。これは私自身の大きな問題である。 N11 Tの問いかけは、私には乱暴するM君をそのままにしておけない何かがある。そこから出ているのではないかと思えた。私の心中ではすでにTをそのように決めてかかっていた。そういうTだというひとつの先入観(Preconception)が確かにあった。Tがそういう自己の内面を探ってほしいと思ってN11がでてきた。 N12 私はTの問題の仕方が少し不満だった。私がN11で求めていたものにまともに応じてもらえなかったから。つまり、なぜTがなぜそんな風に「問いかけ」たくなったのか、それを「手法」自体がもつ意味よりもっとT自身がクライエントに対して持っている深いレベルでの態度につながる形でTに確かめてもらいたかった。 しかしTがその手法に対して私が反対しそうに感じ、幾分構えているように思ったので、私の気持ちの伝え方は慎重になってしまった。</p>	<p>T11 Mさん(母親のセラピスト)と話し合ってから何か治療効果を催促されているように感じた私は、何か自分のやり方を工夫しなければならぬように感じていた。それで自分の新しい試みとしてBoss, M.の言っているようなやり方をとってみたいとなったわけである。 T11のように言いながらも、Nが何か不満を感じている様子を感じた。そのような技巧を弄したやり方に不満なのかと思った。 N12の長い説明は、Nの通常の状態をこんなものだろうと別の形で考えていた私にとって、珍しい感じを与えた。 深いモチベーションとは何だろう。今まで言ったことでは不十分かなと言う感じがしていた。Nが何かを求めているようだが、それが何かということは私には不明だった。</p>	<p>N11 「乱暴するM君をそのまま見ていられない気持ちがあったのかしら?」この方が率直だろう。何かがあったかという問いかけはあいまいすぎる。 N12では率直に、こういったTの考え方は十分わからない、不満であることを告げるべきだったのだろう。「私の問題にしたい方向とはずれてる」ことを告げた後にT11の意味したいことに戻れたらと思う。</p>

のである。スーパーバイザーがスーパーバイジーに期待しているものとの食い違いについては、スーパーバイザーは自分の求めるものに答えてくれない私にいらだち、また自分がそれを私 (T) に気づかせられないということに対して、自分自身 (N) にいらだつという場面があった。スーパーバイザーに対する T の感情をわかりやすく極端な形で表現すれば、「俺のいうことに片っ端から不満そうな顔をして、あいつはちっとも俺を受容してくれていないではないか。俺は何をしたらいいのだ。」というようなものである。こうした食い違いを避ける方法としては、スーパーバイザーがもっと T を受け入れてくれることだという。「あんたはクライアントをどうみるかという自分を問題にしているのだね。僕は君自身の感情、君自身が自分のために感じている気持ち、つまり自分自身をどう感ずるかということ君に問題してもらいたいと思っているのだ。」とはっきり言ってくれたらよかったかもしれないと思う。

2-4 スーパーバイザーの考察

野村 (1965) はスーパーバイザーとしての考察を書いた。T8で「H君に乱暴しないようにしないのはどうしてなの」という「問いかけ」をみてから、クライアントの攻撃性を誘発させたのはまさにこの問いかけではなかったか、とピンときた。それを執拗に追及することに終始し、Tとの距離が広がったまま修復されずに終わった。この問いかけについての T の意識的な意図は独特だがそれなりの論理もあったと思えた。しかし、その陰に T 自身が気づいていない本当の動機が別にあると思えた。M が乱暴しないようになるための直接的な働きかけをしないでは落ち着けない、情動的レベルの経験が T の中に動いたのではないか。しかし T 自身の内面を確かめる、というプロセスはうまく T を誘導できなかった。「私が間違っているのではなく、お前の掘り下げ方がまだ不十分だからだ」というかたくなな態度に次第になっていった。

反省点としては、① T8の「問いかけ」を問題

にすることにあまりに意気込みすぎ、焦ってしまった。②「問いかけ」に対する私の解釈は、Tを理解するための手がかり、きっかけとして関係の中に生かすべきだったが、そのまま T を決めつける弊になった。③①②を含めて、私のセラピストへの接近はかたくな (rigid) に相手を決めてかかり、「このように見てほしい」方向に T の言葉を歪め、脚色して受け取った。④ T は当然ながら自由な内的探索をできず、スーパーバイザーが何かに不満を感じ、要求をしているようだが、どう応じていいかわからない。応じられない不適切感にしばられ、ますます萎縮してしまう。自分の焦りを率直に表明し、2人の間のずれの打開を求めることをしなかった。これはひとつは私の人間的な弱さの問題。もうひとつは、T をどこか一段下にみていて、私自身がひとりの人間として彼に真向かうとするよりは、何かとうまく彼をリードして、かくありたい方向に整えてやる、といった姿勢をぬぐいきれなかったことにある。この反省から言えることは、スーパーバイザーが単なる技術の切り売りや、アドバイスに終わるのでなく、治療者の人間的成長に参与する存在であろうとするならば、スーパーバイザーにもスーパーバイジーと同様に自分を見つめ、真剣な自己成長が必要だと思われる。

2-5 スーパーバイザー／スーパーバイジー関係について

佐治 (1965) はコメンテーターとしてまとめた。

- ①スーパーバイザーの透明さ (Genuineness) が必要である。少しでもスーパーバイジーにこのようにあってほしいと思っているのに、あたかも自分はそんな風には思っていないかのようにふるまうことは、スーパーバイジーにある種の遠慮、感情をひっこめてしまう動きにつながるらしい。②このような不透明さで接するくらいなら、スーパーバイザーとして感じていることを、意見として、押し付けにならない形で「自分の感じ方である」という前提をつけて「提示」すべきではないか。③もしそういうスーパーバイザーの自己表現をし

ないとしたら、どこまでもスーパーバイジーを中心に、スーパーバイジーの内面に入る形で一貫すべきであろう。しかし②③の混合した形でNの誠実さ（セラピーの場面でのNの経験、Tとのスーパービジョン関係の中での経験）がTを動かしたと思える。

2-6 パラレル関係から

考察に付け足すとすれば、Hawkins (2007)のスーパービジョンの7つの焦点のうち、5つめの焦点、スーパービジョン関係から考察する。クライアントとスーパーバイジーとの関係で現実に行き起きていることが、並行してスーパーバイジーとスーパーバイザーとの関係の中に反映されていることが多い。この観点から今回のケースを改めて見直すと以下のパラレルな関係に気づく。それぞれが無意識の本心にあるもの（願望、直感、不安、怒り等）の表出が適切にされないときに、あるいは不適切に表出されたときに、相手にうまく伝わらず関係がギクシャクする、という共通の構造がみられるのではないかと。しかも力関係の上位者⇒下位者への関係の中で起きていることとして伝え方が歪みやすいという側面がある。

・カウンセラー⇒クライアント関係）なんで弟に乱暴するのかという（止められないのか）問いを発せずにはいられず、クライアントの攻撃性を誘発し、関係がぎくしゃくしていく。

・スーパーバイザー⇒スーパーバイジー関係）スーパーバイザーがピンときた「問いかけ」がクライアントの攻撃性を引き出してしまっていることに気づかせたいという、しかしストレートには指摘したくない、スーパーバイジーが自ら気づいてほしいという隠れた動機から率直に伝えられないことが関係にズレを生んでいること。

・お手伝いさん⇒M君の関係）母親から任された子どもたちを安全に守りたいという責任感と支配欲のまざった気持ちから子どもたちを部屋に閉じ込めてしまいがちになり、子どもたちの情緒的

な発達にゆがみが生じている。

・M君⇒H君（弟）関係）自分が不在の時のいたずらを許せず、（愛着の病理も背景に抱えつつ）怒り・攻撃性を上手に処理できず、乱暴が止められない。

3 まとめ

以上、スーパービジョンの逐語記録をもとにスーパーバイザー／スーパーバイジー関係を中心に考察を試みた。スーパービジョンにおいて、スーパーバイザーの内面に何が起きているのか、自己のあり方を問い続ける必要があるのはスーパーバイジーばかりではないということ、50年前の先達から改めて学ぶことができた。

参考文献

- 廣川進 (2019) 「キャリア支援におけるスーパービジョンに向けて」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』16, p.195-212.
- 中田行重 (2016) 「パーソン・センタード・アプローチにおけるスーパービジョンの基本的考え方—Lambers (2013) の紹介—」『関西大学心理臨床センター紀要』7, 101～110.
- 北添紀子 (2005) 「スーパービジョン、ケースカンファレンスの一研究——スーパーバイジーへのアンケートより——」『鳴門教育大学研究紀要（人文・社会科学編）』20 巻
- 沢田慶輔, 佐治守夫, 村瀬孝雄, 野村東助, 筒井健雄 (1965) 「カウンセリングにおけるスーパーヴィジョン：教育相談室」『東京大学教育学部紀要』(7) p.223-241.
- Hawkins, P. & Shohet, R. (2007) *Supervision in The Helping Professions*. Milton Keynes, Open University Press. 国重浩一訳 (2012) 『心理援助職のためのスーパービジョン』北大路書房 p.99.